

[077] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10188>

出版情報：語文研究. 77, 1994-06-05. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《會員著書紹介》

今井源衛他 校注記

新編日本古典文学全集20 『源氏物語一』

小学館日本古典文学全集の新編として第一回『源氏物語一』が発刊された。二十余年ぶりの刷新である。『源氏物語』においては校注者今井源衛・阿部秋生・秋山虔三氏の顔ぶれは旧全集とは変わらず、注釈内容も旧全集を踏襲しつつ、最新の研究成果を取入れた全面改稿版となっている。本文は、最近の注釈書では最良の底本として常用されている伝定家筆本・伝明融臨模本・飛鳥井雅康筆本（大島本）、それに数種の青表紙諸本で校訂したものである。

旧全集と比して特筆すべきは巻末の付録に新たに加わった、今井氏による「漢籍・史書・仏典引用一覧」である。『源氏物語』本文中、漢籍・史書・仏典をふまえたと思われる表現について、和漢の資料を幅広い分野から原典（書き下し文）もしくは大意を提出し、本文との関連を解説したもの。簡潔にしかつ要を得たものとなっており、今後の研究において、典故を検索・検討する際の良き手引きとなろう。

巻頭「古典への招待」は、『源氏物語』の成立を文学史上の単なる点としてではなく、流れにおける一つの到達点として捉えた論で、秋山虔氏によるもの。同氏は「解説」——作者紫式部と物語内容について、また平安時代から近現代に至るまでの享受・研究史を概観——も担当している。

巻末の付録は、他に、「長恨歌」「年立」「官位相当表」「京都歴史

地図」「各巻の系図」「図録」を有す。
尚、収録巻は桐壺巻（花宴巻）。

（平成六年三月 小学館 菊判変型 四九六頁 三、九〇〇円）
〔特別定価〕

工藤重矩著

『平安朝の結婚制度と文学』

本書は、昭和六十二年以来平成二年までに発表された三編の論文を基に増補した第一・二・三章、そして新たに第四・五章を加えたもの。その目次は次の通りである。

- 一 平安時代の婚姻制度
 - 1 はじめに
 - 2 「戸令」の規定
 - 3 『玉葉』の記事の解釈
 - 4 嫡妻・本妻・妾妻
 - 5 継妻・次妻は妾ではない
 - 6 嫡庶の差
- 二 一夫一妻制としての平安文学——『蜻蛉日記』と『源氏物語』
 - 1 『かげろふ日記』——道綱母の場合
 - 2 『源氏物語』と一妻制
 - 3 物語のヒロインは妾の娘——結びにかえて
- 三 若菜巻以降の紫上の妻としての立場
 - 1 はじめに
 - 2 紫上は妾である
 - 3 紫上への喪服
 - 4 出家と婚姻
 - 5 紫上の呼称と妻妾としての扱いとの関連
 - 6 結び
- 四 『うつほ物語』の結婚に関する描写
 - 1 はじめに
 - 2 藤原兼雅の妻妾
 - 3 源正頼の二人の北の方
 - 4 あて宮をめぐる求婚者たち
 - 5 物語と現実
- 五 後期物語における結婚——『狭衣物語』と『夜の寝覚め』——
 - 1 はじめに
 - 2 『狭衣物語』の結婚
 - 3 『夜の寝覚め』の結婚

六 近年の婚姻研究——文学研究の立場からの紹介と批評

- 1 はじめに
- 2 一夫一婦制という用語について
- 3 嫡妻
- 4 「床さり」「床離れ」という制度はない
- 5 平安朝文学研究における最近の状況

あとがき

「一夫多婦制」が常識とされる平安時代の婚姻形態の理解に真向から疑問を提示し、「一夫一妻(多妻)制」を説く。平安時代の婚姻制度を律令の「戸令」の規定などから検討するとともに、蜻蛉日記をはじめ源氏物語、うつほ物語などの文学作品において当時の婚姻制度がどのように作品に反映しているのかを検証し、文学研究の立場から平安時代の婚姻制度に対する従来の誤解を鋭く指摘する。と同時に文学作品の性格上、物語や日記の記述をそのまま当時の制度の根拠とするところの危うさも併せて指摘している。さらに「副妻」「一夫多妻制」などの用語の問題にも触れ、不用意に用いられているこれらの用語の厳密な使用を求める。最終の第六章には、近代の婚姻研究の紹介と批評を置いており、研究史の流れを知るにも有効で、その常識を覆す検証は、文学研究者のみならず、歴史学研究者にもすこぶる示唆的である。

(平成六年二月 風間書房 B 6判 二一七頁 一、五四五円)

大内初夫監修

『時雨會集成』

去る平成五年十月十二日は芭蕉の三百回忌にあたり、様々な記念事業が執り行なわれた。本書もその一環として刊行されたものであ

る。

義仲寺における芭蕉忌を記録・記念するための年間句集は、宝曆十三年の『蕉翁七十回忌粟津吟』を嚆矢として、翌明和元年からは『しぐれ会』、寛政八年以降は『時雨会』と題し天保五年までその刊行が確認されている。本書はその内現存している六十四点の全文、及び付録として「祖翁百回忌」所収寛政五年時雨会記録を翻刻し、更に入集者俳号索引と、解説として田中道雄氏による「時雨会と『しぐれ会』」の論考を収めている。

『しぐれ会』という俳書が、諸国奉納句を集めることによって全国の蕉門俳人の目を義仲寺に向け、芭蕉追慕という共通の精神で結ばれた全国規模のネットワークを形成するという、まさに蕉風中興運動における中心的役割を果たしたことは、田中氏の解説に詳述されている。芭蕉が今日に至るまで俳聖として信奉されてきたのも、蝶夢らを中心としたこうした運動に拠る所大であるのは間違いないが、この俳壇史上特筆すべき文学運動の曰わば機関誌である。『しぐれ会』の全期間に渡る詳細な研究は、そうした日本俳壇史の底流を正確に掴むためにも今後一層必要とされるであろう。そしてその際には、本書が基本的資料として第一級の価値を有するはずである。

また、『しぐれ会』は俳壇事情を窺う資料として役立つだけではなく、文芸としても注目すべき特質を持つ。解説では『しぐれ会』の俳風の特徴として、寂びた趣き、芭蕉及びその門人の作の模倣、更に実景・実情の重視という三点を指摘してある。こうした主調を存しつつも、七十二年に渡るその歴史の中で変化する部分も当然あるわけであるが、そうした変化を通覧する際にも本書は大いに役立つ

はずである。

なお、本書の編集者は「義仲寺」となっているが、実際に編纂に携わったのは、石井大、石川八朗、井上敏幸、大内初夫、田中道雄、若木太一の六氏である。義仲寺の護持に心を砕いてきた先人達の意に倣った点に、本書が単なる學術書にとどまらず、『しぐれ会』そのようにした点に、本書が単なる學術書にとどまらず、『しぐれ会』そのものと同様に真摯な芭蕉追慕の産物であることが窺われ、現代に至るまでの芭蕉尊重の根強さを再確認させられるのである。

(平成五年十一月 義仲寺・落柿舎 A5判 七三六頁 非売品)

石川八朗他編

『宝井其角全集』

芭蕉の門人ではあるが、師とはやや趣の異なる都会的な句を詠んだことで知られる其角の全集である。

本書は編著篇・資料篇・年譜篇・総索引篇の四冊からなるが、次のような特徴をもつ。

- 其角の編著になる俳諧集の全文を最善本をもって記載し、解題・書誌を付す。
- 其角の作品と言動を知り得る資料、其角を中心とした江戸俳諧の実状を正確に知り得る資料を可能な限り収録する。
- 年譜篇では生存中及び没後幕末までの受容史をも記載する。
- 総索引を備えて縦横な利用を可能とする。

本書の出現により其角研究の基礎的な素地は整えられたといえる。其角に関する資料が一所に集められたことにより、これまで研

究者が各自の資料収集によって払っていた労は大幅に軽減されることとなるであろう。本全集を十分に活用することにより、今後一層研究が進んでいくことが望まれるところである。

(平成六年二月 勉誠社 A5判 四冊 八六〇〇円)

板坂耀子著

『江戸の旅と文学』

著者は、前著『江戸を歩く——近世紀行文の世界——』(平成五年三月 葦書房)によって、近世紀行文の特徴とその魅力を、著者自身の体験や私見を交えながら分かり易く説いた。それに続く本書は、その土台となった著者の研究業績、昭和五十年から平成三年までに発表された十二篇の論文をまとめて成ったものである。

著者は、旅そのものの質が変化してきたことによって、近世の紀行文が、「憂い」や「涙」を基調としたそれまでの紀行文の世界から、大きく転換していることを指摘する。そこに読み取れるのは、自ら困難を克服し、旅先の土地に興味を持ち、自然や風物を冷静に観察し批判する姿、また幕藩体制の中での自らの位置を自覚し、他文化圏の許容もなしえる姿である。このような「主体的で近代的な人物像」と、それにふさわしい「正確で明瞭な文体」を確立し得ていた近世紀行文は、文学史的にはほとんど評価されることがなかった。それについて著者は次のように分析する。

古典を評価する人々は、それが、中世的なものを否定して近代へ向かうものであったがゆえに、文学的でないとして(おそらくは、美しくも快くもないとして)、評価しなかった。一方で近

代の人々は、自らが築いた以外の近代的なものが、明治維新以前の日本に存在していたとは、考えようとしなかった。(中略)このような過渡期の時代のなかで、二つの時代をつなぐものとして確実に生まれ、育っていったものが、まさにそれゆえに二つの時代の双方から無視されつづけたのである。

このように無視されてきた近世紀行文を、もう一度見直してみるのは、「古典を読解する力とともに、現代の世界状況や国際問題についても広い興味を持ち、そのような興味を満足させる旅行記を読む眼を持った人々」によって読まれることが必要だということ。

すなわち、古典文学のみに終始しない広い視野を要するということであり、このことは近世紀行文についてだけではなく、文学研究者たるものの態度への提言とも思えることばであり、自らの文学観を見直してみようと啓発される一書である。

(平成五年十二月 ぺりかん社 四六判 三一七頁 二八〇〇円)

重松泰雄著

『漱石 その歷程』

著者が現在迄に漱石研究において成し遂げて来られた業績の豊饒さは、ここで改めて述べるまでもないが、本書をそれを再び確認させると同時に、現在の文学研究への新たな問題提起をも、その方法の内に示しているといえる。本書は漱石の中・後期作品に関して、著者が昭和五十九年以降に発表された論文七編を第一部、その同じ時期の作品についてそれ以前に書かれたものを第二部として編集されたものであるが、それは「あとがき」に「いわゆる〈作中論〉へテ

クスト論」を目的として書いたものではない」とあるように、個々の作品論を単に羅列したものではない。「作品」であれ、テクストであれ、それがつねに閉じられたシステムだと断じ去るのは、漱石の場合必ずしも妥当とはいえない」(「発見」される女たち)六章)との一貫した姿勢を保つ著者は、本書の根本的なモチーフを「風を孕んで十二年の作家的生涯を駆け抜け、その間不断に自らを(生成)し続けた漱石の多様な自己劇化の動態を跡づけ、それらに通底する問題を解明すること」(同)と述べている。「作品論」として作品を断片化したり、「作家論」として一人の作家を物語化してしまうような態度とは無縁の柔軟な視座において、常に変化し生成されてゆく「漱石」を著者は捉えてゆこうとするのである。

又第一部の「罪の子との(共生)―「門」再論―」において、様々な先行論者が発した見栄えの良い断定的な言辞を、作品の実態に引き戻しながら自身の論旨を展開してゆく態度の確実さは、記号論的な術語の濫用や理論の飛躍に慣らされている現在の漱石研究に対し、その自己批評性を喚起させるだけの本質性を備えているものであろう。続いて出される二冊の漱石論集と共に、本書は現在の漱石研究の方法を相対化してゆく重い意味を増してゆくと思われる。

(平成六年三月 桜楓社 三四一頁 四九〇〇円)